『閑居友』考――「心澄む」ことを起点に――

戸波智子

はじめに

「心澄む」という言葉がある。中世の和歌、説話などによく見られるものである。しかしその背景には多様な世界が広がっており、当時の人々のもののとらえ方がうかがえる。中世の文化を考察するうえで、きわめて重要な表現のひとつと言えよう。それゆえに、以前から様々な分野で詳細な検討がなされている。[1]

これを繰り返し用いているのが、慶政[2]によって書かれたとされる説話集『閑居友』（承久四年成立）である。上巻を男性の修行者、下巻を女性中心に描く全三十二話の小規模な説話集だが、「心澄む」という言葉が頻出する。これは何故であろうか。

「心澄む」ことを作者が強く意識していた様子もうかがえる。直接「心澄む」とはないものの、『閑居友』を執筆していると、心が静まってゆくとする記述が見受けられる。

さてまた、つくづくと思には、このあやしの山の中に身お隠しても、八年の秋お送り来ぬ。天竺・晨旦の書おも、こゝにて多く披けり。さるべき契にて、この山の水お飲み、この山の柴折り焼ぶべき縁こそはあるらめとて、思ひのどむる時もあり。かゝるまゝには、たゞかやうの人の跡を思ひ出でて、慕ひ悲しみて心おやすみ侍れば、せめてのむつましさに記し入れ侍ぬるなるべし。（上巻第三話）

上巻第三話同様、「なを〳〵あはれに侍り」（上巻第十二話）「あはれにおぼつかなくこそ」（上巻第十四話）「あはれに偲ばしく侍り」（上巻第十八話）「むつましくこそ侍れ」（下巻第六話）といった、説話の人物の面影を追い求める作者の言葉が度々述べられる。これは、「心澄む」対象へ惹きつけられ思いを馳せる心境を吐露したものであろう。

『閑居友』にはいくつかの執筆動機があると指摘されている。記述によって己の心を慰めるとする一節は、まさに執筆動機としてかねてより挙げられている。つまり、『閑居友』成立に至る契機からして、「心澄む」という表現が大きくかかわっていると理解されるのである。

本稿ではこの表現を起点として、『閑居友』がどのような特徴を持つ説話集であるか、あらためて問い直していきたい。

一、「心澄む」ことの意味

『閑居友』には次のような例が見られる。登場人物の心がいか

に澄んでいたか、またはそれに対し作者がどれほど心を動かされたかを述べる。

。「さて、播磨の国、高和谷といふ所におはして、他事なく後世の行ないして、常には心を澄まして、華厳経をぞ読み給ひける。（中略）発心の初めより命終まで、澄みておぼへ侍り」（上巻第二話）

。「もとの住処のものさはがしかりしが、このほどはいみじくのどかにて、思ひしよりも心も澄みまさりてなむ侍也」（上巻第四話）

。「天台宗法文のたましい、たゞこれにて侍にこそ。かやうに常に思ひけん心の底は、いかばかり清く澄みわたりて侍けん」（上巻第八話）

馬場光子氏は、『閑居友』を含め、中古から中世に見られる「心澄む」という表現は、大半が仏教的な悟りの心境をうたうものであり、これが主要な意味であるという。[3] 同様に、『日本国語大辞典』（第二版）にも、「迷いを去って清らかな心境になる、悟りの境地に入る」とある。先にあげた例も、登場人物が一切の迷いなく修行に邁進し、あるいは己の心を煩わす状況から逃れた様子を述べたものである。現在なされている「心澄む」という表現の定義と、概ね一致すると認められる。

また「心澄む」とは、ただ悟りを得るだけではなく、そうした心境になったことで、心の中に結ばれる像をも喚起する表現であった。何に心を澄ますのか、何に心が澄まされるのか、その対象を想起させる役割を果たしていた。『宝物集』には、

永観律師の往生講の私記には、「一子の慈悲は平等なりといへども、摂取の光明は念仏者を照し給ふ」と侍るめれば、なを〳〵一心に弥陀を念じて、浄土に心をすまし給ふべき也。（巻七）

とあり、「心をすます」を、浄土に心を向かわせ、思い浮かべることを指す言葉としている。このような例は他にも、寂然の今様に「心を澄ましてひとたびもなもあみだぶつといふ人は蓮のうてなにやどりてぞかならず仏のみもとなる」（『唯心房集』）がある。

後述するが、『閑居友』には、観想やこれを促す絵画の話題が多くとりあげられている。「心澄む」ことと視覚表現とは、強い結び付きがあると考えられるのである。

この好例としてあげられるのが、下巻第三話「恨み深き女、生きながら鬼になる事」である。この一話からは『梁塵秘抄』の著名な一首が連想される。

見るに心の澄むものは、社毀れて禰宜も無く、祝無き、野中の堂の又破れたる、子生まぬ式部の老の果（三九七）

下巻第三話は、男を恨んで出奔した女性が、鬼となり、三十年後「遥かなる野中」にある「破れたる堂」で自らの命を絶つという話である。壊れた堂と、三十年という月日の経過が、『梁塵秘抄』と重なりを見せている。『閑居友』には他にも『梁塵秘抄』と同様の文脈を持つ部分があり、これもまた視覚に関わるものである。[4] 右の一首同様、下巻第三話も「見るに心の澄むもの」として記述されたのではないだろうか。

では、「心澄む」ことと見ることが結びつくと、どのような効果が生み出されるのか。心を澄ませて見る、とはいかなる意味を持つ表現なのだろうか。これをよくあらわしているのが、寂然の

『法門百首』である。

『法門百首』は数ある『閑居友』の典拠の中でも、最も重要なものの一つであると考えられる。下巻第十一話末の美文に参照された形跡があることは、既に小島孝之氏が指摘している。[5] 何より、『閑居友』にもよく引かれる『摩訶止観』等の仏典を解釈し、和歌、和文によって記している。[6]『発心集』など先行する仏教説話集が『法門百首』の解釈、和文をそのまま取り入れていたことにも注目したい。[7]

また、寂然は「心澄む」という表現を多用した人物であった。『法門百首』はそれが顕著である。第一首目から、『摩訶止観』の一句を題として詠じ、心を澄ませて見るとはいかなることか説く。

止一　無明転為変明如融氷成水

春風に氷とけ行く谷水を心の中にすましてぞみる（春部、一）

山深きすみかもあらたまの年たちかへりぬれば、嵐の声もかはり、峰の朝日ものどかなるに、止観の窓おしひらきてかすかなる谷をみやれば、音たえにし山水も、春しりがほにいづるいとなみ、いとあはれなり、妄想をのづからしづまり、法門の心にうかびぬれば、観恵の春の風に、無明の氷とけて、生死のふるきながれ法性の水とならん折はかくやと思ひよそふるにや。すまして見るといへる、このこころなるべし

山深い住居において、止観修行の合間に春の景色をながめる。すると心の内に思い描いてきた「無明は転ずればすなわち明となる、氷を溶かして水となすがごとし」（『摩訶止観』巻第一下）の意味内容が、目の前に広がる現実の風景そのものとして体感できる、という。[8] 錦仁氏はこの一首について、「「すまして見る」とはそのように、美しい風景を経典の哲理のあらわれとして見つめる観想のことだろう」と述べている。[9]『閑居友』全体の内容や、「心澄む」ことの意味から鑑みるに、錦氏の主張は肯首すべきであろう。

心を澄ませて見る、という表現が読み手にも馴染んだものであったならば、『閑居友』の説話は視覚的に意識された可能性がある。

二、『閑居友』の美文

では、ほかにこの言葉に対する意識が表れている点はあるのだろうか。そこで『閑居友』にこれも多用されている美文に目を転じてみたい。

『閑居友』には、和歌、漢詩などを引用した美文が見られる。特に、上巻第三話、第十三話、下巻第一話、第十一話には長大な美文が組み込まれている。これらには『古今和歌集』『後拾遺和歌集』といった勅撰集、『伊勢物語』『大和物語』などの歌物語から数多くの和歌が引用されている。

これについては、献呈者（女性を想定）がなじみやすいよう、歌語を多用した美文を書き入れたとする説がある。また、執筆動機が表れている説話や、巻頭、巻末の重要な話に用いられたという主張もある。[10]

確かに、美文に筆を多く割いている説話では、『閑居友』を著した理由が明らかにされている。「願はくは、帳の外を出でず、褥の上お下らずいまそからんあたりまで、げにとおぼしとがめさせ給はば、功徳にや侍」（上巻第十三話）、あるいは、「藻塩草、

かき上ぐべきよし、かねて聞こゑさせければ」（下巻第十一話）といった部分からは、献呈者の存在がうかがえる。また上巻第三話は、先に言及した通りである。

このように美文を書くことと執筆動機とが関わっているならば、「心澄む」という表現とも連絡するところがあったのではないだろうか。[11] そこで、ここでは美文の記述と、「心澄む」ことの関係を考察してみたい。

まず、上巻第十三話の美文を例とし、どのような引用がなされているのか検討してみたい。出典に関しては、既に新日本古典文学大系『閑居友』において明らかにされているので、詳細は省略する。[12]

つら〳〵思ひ続くれば、この一盛の食ひ物は、数もなき労ひより来たれるものにはあらずや。①春の日の長きに、山田を返す賤の男の、引くしめ縄のうちはへて、営みたつる労ひ、②驚かす鳴子の山田の原のかり庵、③霜冴ゆるまでたしなみて、④晩稲を積める営み、或は、⑤上れば下る稲舟に、水馴れ棹差しわび、或は、逢坂山のはげしきに、足を早むる駒もあり、又、てづから負ひ、みづから荷なへる営み、その数いくそばくぞや。山人の⑥ねるやねりその手もたゆく、力お尽くせるたき木にてこれを営み、月の夜ごろは寝ねもせず、からく営める塩竈の行方などを思ふに、涙もとゞまらず覚えて（傍線部番号は筆者による）

傍線⑤は『古今和歌集』東歌、⑥は『拾遺和歌集』凡河内躬恒歌が確認されている。また、九条良経歌の引用が目立つ（傍線①・③・④）。良経は詩歌あわせて下巻第十一話でも参照されている。様々ある典拠の中でもよく目にされていたようで、美文を書くにあたり、良経の家集が傍らに置かれていた可能性が高い。それぞれもとになったと考えられる和歌は次の通りである。

・傍線①

釈阿九十賀たまはせ侍りし時、屏風に、五月雨

小山田に引くしめ縄のうちはへて朽ちやしぬらん五月雨のころ（『新古今和歌集』一二一六）

・傍線③

みたらしの川辺にさよはふけにけりたちまふ袖に霜冴ゆるまで（『秋篠月清集』一三七〇）

・傍線④

晩稲積む山田の庵は秋過ぎて袖を時雨に干さぬころかな（『秋篠月清集』一三〇三）

③と④にある「霜冴ゆる」や「晩稲」は珍しい言葉ではない。しかし「霜冴ゆるまで」と、あるいは「干す」と組み合わされることの多い「晩稲」を「積む」と結びつけた例は、管見の限り良経以前には見られない。

良経は慶政の父と目される人物であるが、それのみを理由として引用されたとは考えにくい。良経は『新古今和歌集』の序を著すなど、優れた歌人であった。しかもその詠歌に隠遁の志向する内容が見られ、それが『閑居友』の内容に合致していたとも想像される。[13]

このように、『閑居友』の美文は、ただ歌語を並べただけではなく、ある特定の和歌が引用されていると確認できる。

さらに、傍線②については、再び『梁塵秘抄』に注目すべき一

首がある。「心の澄むものは、秋は山田の庵毎に、鹿驚かすてふ引板の声、衣しで打つ槌の音」（三三二）である。推測するに、この美文自体が「心澄む」ものとして認識されていたのではなかろうか。

このような考え方の背景を知る為には、当時和歌がどのように認識されていたのかさぐる必要がある。以降では、和歌と「心澄む」ことの関係について述べた言説を追ってみたい。

藤原定家は、和歌は心を澄まして詠むことが肝要であると主張した。

詩は心を気高く澄ますものにて候。尤も歌よまむ時、貴人の御前などならば、心中にひそかに吟じ、さらぬ会席ならば高吟もすべし。歌にはまづ心をよく澄ますは、一つの習ひにて侍るなり。（『毎月抄』）

彼はすぐれた和歌を詠む為に、まず詩を吟じることをすすめている。詩歌そのものが「心澄む」ものであるという意識が見受けられる。同様の主張は『定家卿相語』（安貞二年頃）にも見られ、「心を澄ませ」るものとして、「紫式部の筆」（『源氏物語』）とともに「文集の文」（『白氏文集』）があげられている。[14]

和歌がすなわち「心澄む」ものであるという捉え方は、西行や明恵、慈円らの間にも見受けられる。早くに和歌が「心澄む」もので、かえって仏道に進む心を増すとしたのは西行だった。

昔上人云、和歌はつねに心すむゆへに悪念なくて、後世をおもふその心をすすむる也といはれし。此事実なり。よはひ満六十にて、余命なしとおもひて、世をのがれて一向浄土を求に、和歌好し心にて道心をこのめば、誠にこころちらず、やすかりける。抑六十年の祈請の趣、もし偽ならば神刑あるべし。（『西行上人談抄』）

和歌を詠むことは、常に「心澄む」状態にあり、後世を思う心をすすめる。遁世し、往生するために、和歌を好む心をもって仏道に向かえば、心が散漫にならずよい、という。

西行のような主張は、慶政と交流のあった明恵も述べている。

昔より人を見に、心のすきもせず、恥なげにふた心なる程の者の、仏法者に成たるこそ、つゝ〳〵なけれ。此趣き契経の中に、仏も演給へり。論にも見へたり。少も違はぬ事なり。（中略）心の数寄たる人の中に、目出度き仏法者は、昔も今も出来るなり。頌詩を作り、歌連歌に携る事は、強ち仏法にては無けれ共、加様の事にも心数寄たる人が応て仏法にもすきて、智恵もあり、やさしき心使ひもけだかきなり。（『栂尾明恵上人遺訓』）

詩歌に親しんだ者こそが仏道にふさわしいというこの考え方は、慈円にも見られ、「我国のことわざなれば、ただ歌の道にて、仏道をも成りぬべし」（『拾玉集』第五帖）と記している。[15] 後に無住が、和歌はすなわち陀羅尼であるという和歌陀羅尼観を著すが、[16] そうした思考の源にあるのが、西行らの主張であったことは疑いなかろう。彼らがいずれも和歌の中に「心澄む」という言葉を詠み込んでいることも、注目すべき点である。

和歌は、そのものが「心澄む」ものであり、これを多用する美文は『閑居友』に関わる人々の心が澄むよう、導く役割を果たしている、と考えられる。

三、観想

ここまで、「心澄む」という表現を追い、『閑居友』においては美文という形でこの表現への意識が表れていることを述べてきた。では、具体的に一話を読み解く場合、「心澄む」という言葉は構成や人物の描き方にどのような影響を及ぼしているのだろうか。そこで最後に、心を澄ませて見ること、すなわち観想を主題とした説話を取り上げて考察を試みたい。

『閑居友』には、絵画や観想といった視覚にまつわる話題を多く取り上げるという特徴がある。たとえば、説話の末尾で、登場人物の絵画が存在していたと記す。

。かの播磨の高和谷に、絵に描ける御姿のをはするは、木の下に石を敷き物にて、檜笠と経袋とばかり置き給ひたる姿とぞ聞き侍し。（上巻第二話）

。さてその像を絵に描きて、あはれみ、尊みて、人みな持ちたり。「あはれ、このほど売りて来よかし。買ひてとらせん」といひき。侘び人の姿にて、頭には木の皮をかぶりにして、竹の杖突きて、藁沓履きたる姿とぞ。（下巻第六話）

。さても、この人どもの姿をも、絵に描きて売るとぞ語り侍し。すべて、唐土は、かやうの事はいみじく情ありて、亡き後までも侍にや。（下巻第七話）

その上で観想について度々言及する。特に、不浄観（上巻十九～二十一話、下巻第九話）や日想観（上巻第十八話）は主題とし、とりわけ関心を持っていたようである。

絵画と観想が互いに密接な関係にあるのは言うまでもなく、この時代、観想のための絵画が多く生み出されている。上巻第二話に「木の下に石を敷き物にて…」とあるのは、明恵の『樹上坐禅像』などを彷彿とさせる。また、不浄観の絵画としては、記録上ではあるが、後白河院皇女宣陽門院発願の醍醐寺琰魔堂（『閑居友』成立翌年に建立）に、九相図が描かれていたことが知られている。[17]

ここでとりあげるのも不浄観を主題とした下巻第九話「宮腹の女房の、不浄の姿を見する事」である。ある僧に恋をされた美しい女房が、僧の妄執を絶つために、一切繕わぬ姿を見せるというもので、『閑居友』の四話ある不浄観説話の中でも、特に知られた一話といえよう。次に引用するのは、女房が僧を家に招く場面である。

かゝるに、いくほどもあらで、「このほどまかり出でたる事侍。今夜はこれに侍べし」といひたり。さるべきやうに、出で立ちて行きぬ。この人出で会ひて、「仰せの揺ぎなく重ければ、まかり出でて侍。たゞし、この身のありさま、臭く穢らはしき事、譬えていはんかたなし。頭の中には脳髄間なく湛へたり。膚の中に、肉・骨を纏へり。すべて、血流れ、膿汁垂りて、一も近付くべき事なし。しかあるを、さまざまの外の匂を傭ひて、いさかその身を飾りて侍れば、何となく心にくきさまに侍にこそありけれ。そのま事のありさまを見給はば、定めてけうとく、恐しくこそおぼしなり給はめ。このよしをも、細かに口説き申さむとて、「里へ」とは申し侍りし也」とて、「人やある。火ともして参れ」といひければ、切灯台に火いと明くともして来たり。

さて引き物を上げつゝ、「かくなん侍を、いかでか御覧じ忍び給ふべき」とて出でたりけり。髪はそそけ上がりて、鬼などのやうにて、あてやかなりし顔も、青く、黄に変はりて、足などもその色ともなく、いぶせく汚くて、血ところどころに付きたる衣のあり香、まことに臭く、耐ゑがたきさまにて、さし出でてさめ〴〵と泣きて、「日ごとに繕ひ侍わざを止めて、ただ我が身の成り行くにまかせて侍れば、姿も着る物もかくなん侍にはあらずや。そこは、仏道近き御身なれば、偽りの色を見せ奉らむも、かた〴〵畏れも侍ぬべければ、かやうにうちとけ侍ぬる也」と、かき口説きいひけり。この人、つゆ物いふ事なし。さめ〴〵泣きて、「いみじき友に逢ひ奉りて、心をなん改め侍ぬる」とて、車に急ぎ乗りて、返にけりとなん。

女房は、人間の不浄について切々と語った後、自分から灯りの下に姿を見せる。そののちに、僧の目に映った女房の有様が描写される。数ある不浄観説話の中でも、女性が見られる存在のみにおさまらず、主体的な行動を取るものは他にない。しかし、この説話は、女性の主体性を語ることが目的ではないだろう。おそらく、女房が不浄を語り、灯りを付けさせ、姿をさらす、という構図に主眼がある。

「この身のありさま、臭く穢らはしき事…」から始まる女房の語りは、本文中に明記していないが、『往生要集』大文第一・人道不浄を簡略にしたと思われる内容である。[18]

『往生要集』は極めて視覚的な書であった。たとえば浄土の景色を思い描く場合、『往生要集』の文章を想起するという例が見られる。

阿弥陀堂に参りたれば、御懺法のをりなりけり。あなうれしと思ひて、御階に上りて仏を見たてまつれば、無数の光明輝きて、十方界に遍じたまへらんと見えたまふ。かの往生要集の文を思ひ出づ」（『栄花物語』「たまのうてな」）

『往生要集』大文第一・人道不浄は、数々の経典を引きながら、人間の不浄を事細かに説くものである。人の体の中にある骨、筋、肉、臓物、血や体液、その上を包む皮膚を描写し、全て不浄のものであるとする。不浄観を語る場合、必ず引き合いに出され、後代の文学、絵画などに多大な影響を与えている。

これをふまえた不浄観に関する長文が説話集に収録されるようになるのは、管見の限りでは『宝物集』の頃からである。また、『発心集』にも同様の長文が見られる。

。次に不浄を観ずべしと申は、我身も人の身も不浄なる事を観ずるなり。たとへば、絵がける瓶の中にもろ〳〵の糞穢を入たるが如しといへる、こまかには横川の僧都の往生要集にしるせり。西施・南威がひとたびゑみし、みる人千金をおしまざりし、野の間、塚のほとりにすてられしかば、その姿にかはり、白き膚は青くさり、赤き唇は黒く成て、口より白き虫おほく出て、不浄爛漫せり。遠、香甚にほひて、たゞ忍ぶべき人なし。犬は手をくひて東西にはしり、烏は眼をくじりて南北に飛、つゐに蓬がもとに塵となりて、残の骨のみあり。誰の心ある人か是に着をなして、手とり口すひ床を一にせん。この観念をなすとき、無始生死の罪障消滅して、往生極楽の因を得る物なり。この故に、恵心僧都は、「此不浄観ならず

は、つねに塚の間にのぞみて、死人の屍をみよ」とはをしへ給へるなり。（『宝物集』巻第六）

。大方、人の身は、骨・肉のあやつり、朽ちたる家の如し。六腑・五臓のありさま、毒蛇のわだかまるにことならず。血は体をうるほし、筋つき目をひかへたり。わづかに薄き皮ひとへおおへる故に、此の諸々の不浄を隠せり。粉を施し、たき物をうつせど、誰かは、偽れるかざりと知らざる。海に求め、山に得たる味ひも、一夜へぬれば、悉く不浄となりぬ。いはば、描ける瓶に糞穢を入れ、くさりたるかばねに錦をまとへるが如し。もしたとひ、大海を傾けて洗ふとも、きよまるべからず。もし栴檀をたきて匂はすとも、久しくかうばしからじ。（『発心集』巻四・六）

これらは、『往生要集』を参考にしつつ、不浄観とは何か、対象をどのように観ずべきか、具体的な形式を示す。しかし説話本体で対象をどのように観じたかを述べているわけではない。いずれも、説話の後に付されているのみである。

同じように不浄観についての長文を取り入れながら、『閑居友』では女房に語らせ、僧にその様子を思い描かせた。そして改めて灯りの下に姿を見せ、彼の心に築かれた不浄のイメージと自らを一致させたのである。

女性の死体の変化を描く現存最古の図様である、聖衆来迎寺本『六道絵』人道不浄相（十三世紀後半成立）には、『往生要集』大文第一・人道不浄の抄文が貼り付けられており、不浄に関する『往生要集』の語りと、不浄の図が同一の画面上で展開される。[19] 説話と絵画という違いに考慮すべきではあるが、『往生要集』を思わせる語りの後、容貌をあらわにするという行為は、まさにこの図様の仕組みに類似している。

彼女の言葉は不浄の絵を説く『往生要集』の文であり、これに近づけた外見は、その文を体現する絵画ということが出来よう。『閑居友』に見られる女性の能動性は、この構図を支えるものとなっている。生身の女性をどのように観ずるべきか。死体ではなく、生きた女性の口から語らせることによって、観想、つまり心を澄ませて見る術を伝えているのである。

おわりに

『閑居友』は説話の主題や表現、そして成立の動機に至るまで、「心澄む」という言葉に貫かれている。多用されているのは、そういった意図が表出したものと考えられよう。視覚的な著述は、この説話集によって絵画を見て為すように、観想をすることを目的としていると想像される。

「心澄む」という表現には、更なる側面があり、今後も検討を要するものである。また、『閑居友』と絵画の関わりについても多くの課題が残されている。下巻第八話には地獄絵が取り上げられている。また下巻の数話には中世の小野小町の逸話を取り入れた様子がうかがえる。『九相詩絵巻』に描かれる女性が小町とされていくことはよく知られている。『閑居友』がこういった絵画とどのような関係にあったのか、非常に興味深く、論考を深めていきたい。

【注】

（1）竹内隆「『心澄む』考―西行歌の清澄性について―」（『大正大学大学院研究論集』九巻、一九八五年二月）、馬場光子『今様のこころとことば―『梁塵秘抄』の世界―』（三弥井書店、一九八七年）、小野恭靖「『梁塵秘抄』法文歌の信仰と表現」（『中世歌謡の文学的環境』笠間書院、一九九六年）、佐藤晃「〈心澄む〉をめぐる覚書―中世文学のことば―」（『山形女子短期大学紀要』二八巻、一九九六年三月）、錦仁「和歌の思想　詠吟を視座として」（院政期文化研究会編『権力と文化』〈院政期文化論集第一巻〉、森話社、二〇〇一年）、柴佳世乃「歌の声と読経の声―音声をめぐる一考察―」（『文学』二〇〇二年三月・四月号）などがある。

（2）慶政（一一八九～一二六八）は証月房とも呼ばれ、天台宗寺門派の流れを受け、密教にも通じた人物であった。明恵と親交があり、九条道家の兄であったとも言われている。聞書や散逸書も含め、多くの著作を残し、往生伝等の書写を積極的に行った。

（3）注1馬場前掲書参照。

（4）上巻第八話には次のような一節が見られる。

この文の心は、このうき世の外に別に仏の国なし。惑ひの人の前には、あやしの木草茂りたる穢らはしき所と見ゆれども、悟りの眼の前には、波の音、風の声、みな妙なる御法お唱へ侍ぞかし。

『梁塵秘抄』には次の一首が見られる。

極楽浄土のめでたさは、一つもあだなることぞなき、吹く風立つ浪鳥も皆、妙なる法をぞ唱ふなる（一七七）

『観無量寿経』の「宝池観」という観想における浄土の風景として描写されるもので、他書にもしばしば引用される。荒井源司『梁塵秘抄評釈』（甲陽書房、一九五九年）参照。

（5）小島孝之「教法と文芸―「野寺の鐘」をめぐって」（『国文学』三二巻七号、一九八七年六月）。

（6）小島氏の指摘以外にも、『法門百首』を典拠とした用例が見られる。

上巻第五話「清海上人の発心の事」では、『摩訶止観』に説かれる四種三昧について、長文を用いて説明する。

そも〳〵四種三昧といへるは、一には常坐三昧。いはく、九十日を限りて結跏正坐して、思を法界に繋けて、一切の法は仏法也と信じて、寂滅法界に安住すれば、①こゝに居ながら諸仏を見奉り、仏の法説を聞く也。二には常行三昧。いはく、九十日お限りて、身に常に行道し、口に常に阿弥陀仏の名を唱へ、心に常に阿弥陀仏を念じて、休み息むことなし。神を運ばずして諸仏を見奉り、仏の説法を聞く也。三には半行半坐三昧。いはく、日夜六時に六根の罪を懺悔して、百千万億阿僧祇劫の罪を滅して、五欲を離れずして六根を浄め、釈迦・多宝・文殊・薬王等の諸〳〵の大菩薩を見奉る。四には非行非坐三昧。いはく、随自意これ也。諸経に説くところの行なひの上の三に当らざるは、みな随自意三昧なるべし。（中略）四種三昧の中ノ常行三昧には、②「晴れたる星を見るがごとく、化仏を見奉る」など、止観には説きて侍めれば、

さやうに侍けるにこそと、尊く思ひやられ侍。（中略）陳ノ太建十七年、③天台大師終りおとり給ひしに、智朗禅師ノ、「死に給ひなむ後は、誰おか尊み仰ぐべき」と問ひ奉りしには、「四種三昧、これ汝が明道す也」とぞ、答へ給ひける。

①常坐三昧と、②常行三昧、そして③天台大師智顗臨終の場面において、『法門百首』にも同様の文脈がある。特に②常行三昧の部分は、『摩訶止観』巻二上「明眼の人の清夜に星を観るがごとく、十方に仏を見ることもまたかくのごとくに多し」（原漢文、私に読み下した）に原典が求められる。しかしこれをそのまま引用するのではなく、『法門百首』夏部に見られる和歌と注文を、和文に直す手本としている。

止二　清夜観星

雲井まで浮木にのりてゆかねども星あひの空をうつしてぞみる（二二）

常行三昧おこなふ人の観成じて仏をみる時、晴れたる星を見るがごとく、十方の仏をみるといへる文なり、昔浮木にのりてたなばたにめぐりあへりし人のごとくならねど、ここにしても星あひのそらをうつしてみるやうに、はるかに十方の国土へゆかねども、ここながら仏を見るといふこころなり、常坐三昧をあかすところに水鏡をてらして、身づからそのかたちをみるがごとしといふ文にもかよひて心しられぬべし

③天台大師智顗臨終の場面も別部に次のようにある。湛然の『止観輔行伝弘決』巻一之一に載せる逸話を、寂然が和歌に詠んだものである。

不審没此何生

しるべなきわれをばやみにまよはせていづこの月のすまむとすらむ（五八）

これも天台大師滅にいらせ給ひしとき、智朗禅師といふ人とひたてまつれることばなり、観音きたりてむかへたまふべしともこたへ給へる

（7）山本章博「恋と仏道―寂然『法門百首』恋部を中心に―」（『国文学論集』（上智大学）三十三巻、二〇〇〇年一月）。

（8）明恵にも類似した着想で詠まれた和歌がある。

この暁、禅堂の中に入る。禅観のひまに眼を開けば、有明の月の光、窓の前にさしたり。わが身は暗き所にて見やりたれば、澄める心、月の光にまぎるゝ心地すればくまもなく澄める心のかゝやけばわが光とや月思ふらむ（『明恵上人歌集』一〇八）

（9）注1錦前掲論文、二五三ページ。この一首について述べたものとしては、他にも山本章博「寂然『法門百首』の形成と受容」（『和歌文学研究』八〇巻、二〇〇〇年六月）がある。山本氏はこの観想の合間に風景を見ることで、そこに宗教的風景を感得するという用例が、明恵にも見られることを指摘している。

建保四年四月に、楞伽山の草庵にあり。坐禅入観のひまにかけ作りたる縁のきはに立ちたれば、谷より峯に至るまで、藤の花咲き上れり。松にかゝり風になびきて、地より空に上るに似たり。昔、如来、楞伽王の請を受けて、

妙花宮殿に乗じて上り給ひしよそほひかくやと覚ゆれば花宮殿を空に浮べて上りけむそのいにしへをうつしてぞ見る（八四）

（10）青山克彌『鴨長明の説話世界』（桜楓社、一九八四年）、美濃部重克「『閑居友』―高貴な女性の要請に応えて」（『解釈と鑑賞』五八巻十二号、一九九三年二月）など。

（11）『閑居友』に影響を受けた説話集『撰集抄』にもこの長い美文の形式が受け継がれている。小峯和明氏は、『撰集抄』に収録された増賀説話の結末に付された美文について、次のように述べている。

ここには増賀の名利を捨てた心を追体験すべき心的な浄化作用が伴う。集中に頻出する「心をすます」鍵の表現とも合わせ、美文体がもたらす浄化作用もおそらく神明観とは無縁ではないだろう。とりわけ諷誦表白体の対句的修辞や和歌的修辞を基調とする文体は、（中略）先にみた愚管抄や真言伝の真名に対する「和語」の意識や沙石集にいう和歌陀羅尼観などにも通底するように思われる。

小峯和明「中世説話集の仏法・王法論」（『日本文学』一九八六年四月）参照。

（12）小島孝之校注『閑居友』〈新日本古典文学大系〉を参照した。

（13）良経歌に見える隠遁志向については、様々あるが、新しいものとしては谷知子『中世和歌とその時代』（笠間書院、二〇〇四年十月）がある。

（14）近代の源氏物語見さたする様又あらたまれり。或ひは歌をとりて本歌として歌をよまむ料、或ひは識者をたてて紫上はたが子にておはすなど言ひ争い、系図とかやなづけてさたありと云々。古くはかくもなかりき。身に思ひ給ふるやうは、紫上の父祖の事をもさたせず、本歌を求めむとも思はず、詞づかひの有様のいふかぎりなきものにて、紫式部の筆をみれば、心もすみて歌の姿詞優によまるるなり。文集の文、此定にて、文集にて多く歌をよむなり。前宮内卿〈家隆卿〉云

なお、『白氏文集』の作者白楽天はその生き様そのものが「心澄む」ものであると捉えられていた。『唐物語』には次のようにある。

昔元倭十五年の秋、白楽天罪なくして江すといふ所にながされぬ。次の年の秋、入り江のほとりに、夜友を送りけり。松風、波の音身にしむゆふべ、うれへの涙いとおさへがたく、さよもふけゆくほど、空すみわたる月のひかり、波にしたがへるを見ても、我身ひとりはしづまざりけりと思ひみだれつつ、ひともなぎさを物心ぼそくてあゆみ行くに、波のうへはるかに、琵琶のしらべ様々にきこえて、かきあはせなどのありさま、世にたぐひなきほどなり。（中略）この人は世中の人の心のみな濁れるを憂しとやおもひけん、ひとり澄まして、つねは都にあとをなんとどめざりける。（第二　白楽天、上人の妻の琵琶を聞く語）

この説話から想起されるのが『閑居友』下巻第二話「室の君、

顕基に忘られて道心発す事」に登場する、源顕基である。彼は「罪なくして配所の月を見ばや」と言い、常に白楽天の詩を口ずさんでいたという。顕基が白楽天に重ねられていることはいうまでもなく、彼もまた「心澄む」存在だった。

(15) 伊藤聡「梵・漢・和語同一観の成立基盤」(院政期文化研究会編『権力と文化』〈院政期文化論集第一巻〉、森話社、二〇〇一年)。

(16) 菊池仁「和歌陀羅尼攷」(『伝承文学研究』二八巻、一九八三年一月)。

(17) 竹居明男「醍醐寺琰魔堂とその周辺」(『仏教芸術』一三四巻、一九八一年一月)阿部美香「醍醐寺焔魔堂史料三題」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇九巻、二〇〇四年三月)同「堕地獄と蘇生譚―醍醐寺焔魔王堂絵銘を読む」(『説話文学研究』四十巻、二〇〇五年七月)同「醍醐寺焔魔堂の図像学的考察」(真鍋俊照編著『仏教美術と歴史文化』法藏館、二〇〇五年)。

尚、宋版一切経に関連する一連の事業を通して、九条道家・慶政と宣陽門院・行遍(ともに東寺の復興事業を行っている)が結びついていたことは、牧野和夫「慶政と聖徳太子信仰―宋版一切経補刻事業を軸に―」(『仏教史学研究』第五十巻第一号、二〇〇七年十一月)に指摘がある。

(18) 『閑居友』〈新日本古典文学大系〉注参照。

(19) ただし聖衆来迎寺本「六道絵・人道不浄相」が直接に『往生要集』を参照している絵画ではなく、『摩訶止観』など詳しく不浄観を説く仏典をもとに描かれていることは、川上実「九相観の絵画(一)(二)(三)」(『愛知県立芸術大学紀要』十巻、十二巻、十三巻、一九八一～一九八四年三月)、加須屋誠「聖衆来迎寺六道絵「人道不浄相図」考」(『仏教説話画の構造と機能―彼岸と此岸のイコノロジー』中央公論美術出版、二〇〇三年)などに指摘がある。ここでは、『往生要集』が僧俗を越えて受容されたより一般的な文献であったことを考慮して、当時の人々は『往生要集』を参照して描かれた絵画と受け取っていたと推測し、このような記述とした。

【引用文献】

『閑居友』『宝物集』『新古今和歌集』『梁塵秘抄』(新日本古典文学大系)『法門百首』『秋篠月清集』(新編『国歌大観』)『拾玉集』『唯心房集』(私家集大成)『毎月抄』『栄花物語』(新日本古典文学全集)『発心集』(新潮日本古典文学集成)『唐物語』(講談社学術文庫)『西行上人談抄』『定家卿相語』(日本歌学大系)『栂尾明恵上人遺訓』(日本古典文学大系)

(となみ・さとこ　千葉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程二〇〇八年修了)